

「黒蜥蜴」の表象をめぐって

—— 江戸川乱歩『黒蜥蜴』論 ——

海老澤 彩 香

1 はじめに

『黒蜥蜴』は昭和九年一月から十一月にかけて雑誌『日の出』に連載された江戸川乱歩の長篇小説である¹。江戸川乱歩作品の代表的存在である名探偵明智小五郎と、この世にある美しいもの全てを手に入れようと目論む女賊黒蜥蜴による知的な推理勝負に加え、敵対する者同士が情を交わし合うという劇的な展開が繰り広げられる物語となっている。昭和三十六年十二月に三島由紀夫が雑誌『婦人画報』で戯曲『黒蜥蜴』を発表し、更にそれを基にした演劇によって知名度が一気に上昇し、今日に至るまで舞台や映画、ドラマ作品などが繰り返し上映されるようになった。

結果として、『黒蜥蜴』は乱歩作品の代表作としての地位を築き、女賊黒蜥蜴は我々が良く知る「明智小五郎、怪人二十面相、小林少年らと並んで、江戸川乱歩の生んだキャラクターで広く人口に膾炙した」²とも評されるほど大きな存在になったといえるだろう。

さて、この女賊黒蜥蜴の特徴といえば宝石を贅沢に着飾った妖美な女性であることの他に、全身黒ずくめの格好と左腕に印された「一匹の真黒に見える蜥蜴」の「入墨」が挙げられる。そのような外見的特徴から彼女に対して「黒衣婦人」、「黒天使（ダーク・エンジェル）」など実に様々な呼称が用いられるが、作中で彼女の本名は一切明かされずその素性は誰とも知れない。子分の雨宮潤一に対し

ても「あたしは女泥棒」と述べるだけで、その他に生い立ちや過去のいきさつなどパーソナルな情報には一切言及されない。このように極めて余白の多い女賊にとつての最大のアイデンティティとなるものが「黒蜥蜴」という「あだ名」である。彼女はKホテルにおいて名探偵明智小五郎との初勝負を経て、黒衣のいでたちで素早く逃走する姿を人々に見せつけることで「黒蜥蜴」というイメージを残していく。この「あだ名」はまさしく彼女の身体に刻印された「一匹の真黒に見える蜥蜴」の「入墨」から想起されるものであり、作品の最初と最後に「生きているかのように」蠢き出す様子が描かれている。身に纏った生物の影が実体化することによって女賊にどのような作用をもたらすのか。本論では女賊に象られた「黒蜥蜴」の像を明確化し、作中でどのように映し出されているのかを探り当てていく。

2 入墨―身体に息づく生物―

序章で述べた通り、女賊の左腕にある「黒蜥蜴」の模様を象った「入墨」は、「彼女のあだ名の由来を為し」ている決定的な要因といえる。この「入墨」に関する記述が作中で見られるのは、冒頭章の〈暗黒街の女王〉と最終章の〈蠢

く黒蜥蜴〉で女賊が明智の腕の中で息絶える場面の二回のみである。しかし「黒蜥蜴の入墨が、このみは今もなお生のあるものの如く、主人との別離を悲しむがように、幽に蠢いていているかに感じられたのである。」という文章で物語の幕が閉じられることから、「入墨」が『黒蜥蜴』という作品の始まりと終わりを結ぶ大きな「鍵」となっていることが推測出来よう。

そもそも、いれずみ・タトゥーと呼ばれるものは、皮膚に針や刃物を刺し入れて文様を彫り込むことで作られる身体装飾の一種である。世界各国において社会的地位を示すもの、あるいは魔除けや呪術、儀式の一環として行われるものなど、様々な目的や意味合いを持つて今日の文化に浸透してきた。日本社会におけるいれずみの全盛期は江戸時代であり、遊女と客が互いの愛情を確かめ合うべく指に小さい点を入れた「入れぼくろ」や、浮世絵や歌舞伎の登場人物に見られるような全身に具象画を彫り上げる「彫り物」など、日本独自のいれずみ文化が発達したとされている³。勇ましさを美しき、あるいは何か強い信念を抱いていることを顕示するなど、人によって目的は様々ではあるながらも、いれずみを身体に施すという行為には何かしら強い意味が込められるものだといえるだろう。

ここで、いれずみを題材にした文学作品の一つである谷崎潤一郎の短編小説「刺青」(『新思潮』明治四十三年十一月)を援用し、いれずみと身体の連動性について言及したい。「刺青」の主なあらすじ書きとしては、江戸時代屈指の腕利きの彫師である清吉が自分の見染めた娘の背中に大きな「女郎蜘蛛」を彫り上げることで、理想の美を司る「ほんとうの美しい女」を作り出すというものである。江戸川乱歩が各自著伝に幾度も谷崎の小説を愛読したという記述を残していることから、今日に至るまで谷崎潤一郎は乱歩の作品傾向に多大な影響をもたらした人物の一人として位置付けられている。殊に江戸川乱歩の中編小説「パノラマ島綺譚」(『新青年』大正十五年十月〜昭和二年四月)の内容として、主人公人見廣介が自分と瓜二つの大富豪菰田源三郎になりすまし菰田の財力を使って無人島にパノラマの王国を作り上げるといふ物語は、大富豪の岡村が箱根山中の盆地にユートピアを作り出すといふ谷崎の「金色の死」(『東京朝日新聞』大正十三年十二月四日〜十二日)を下敷きにして執筆されたことがよく知られている。同様に女賊黒蜥蜴と「刺青」の娘においても生物のいれずみを身体に施した女性であるといふ共通点が見出せることから、両作品に何らかの関連性があると感じられる。

「刺青」の前半では、身体にいれずみを刻まれる過程において「半死半生」になるほどの苦痛を強いられる有様が描かれている。「堪え難い針先の苦痛」と「真紅に血を含んで膨れ上がる肉の疼き」にもだえながら大の男でも呻かずにはいられないほど激しい痛みを伴うものとされているが、清吉は麻酔剤によつて娘を眠らせたまま背中一面に大きな「女郎蜘蛛」を彫り上げる。この時、「不思議な魔性の動物」と呼ばれる「女郎蜘蛛」の模様がまるで「生きているかのように」「八本の肢を伸ばしつゝ、背一面に蠕」り、娘を眠りから引き起こしていく。「次第々々に知覚を恢復し」た彼女は身に刻まれた苦痛に耐えながらも店に來た時とは異なる態度を見せていき、やがて身支度を整えて戻ってきた時には「苦痛のかげもとまらぬ晴れやかな」様子で「今迄のような臆病な心をさりと捨て」て、「ほんとうの美しい女」へと生まれ変わったと清吉に告げるのである。娘のいれずみを彫り込まれた後の内なる変化は如何にして生じたのか。いれずみを身体に取り入れた人々の体験を見聞した斎藤卓志の『刺青墨譜 なぜ刺青と生きるのか』(春風社、平成二十七年)第六章「背負っていくもの」の冒頭において、いれずみが人間の身体に及ぼす作用が次のように説明されている。

刺青もある段階までくると文様がただの文様ではなくなってくる、それまでとは違った何か加わってくると何人かの人から聞いた。／入れた人間にはどうも別なものが見えてくるらしい。彫り始めは自分の欲求を満たすための文様であつたのに、いったん皮膚に入ると、静かながらもからだの奥から「生き物」として息をし始めるといふ。呼吸だけではない。意志をもたげてくる。

すなわち、娘が手に入れた美しさとは「蜘蛛の肢が生けるが如く蠕動」し、娘の身体を「抱きしめて」いる「女郎蜘蛛」の意識そのものだということである。「半死半生」の域に達するほどの苦痛を強いられながら皮膚に刻んだ文様が魂を宿し、まさしく斎藤が述べる通り「生き物」が精神の中にまで入り込みもう一つの人格が形成されていくことを示唆しているといえよう。岩佐壮四郎も同様に「刺青」——〈宿命の女〉〈ファム・ファタル〉」（『関東学院大学文学部紀要』四三巻・昭和六十年）において、徐々に意識を回復する娘の様子は「女郎蜘蛛を背中に生息させた女としての誕生を生なましく活写」したものであり、「女郎蜘蛛」が「肉体を浸食」することで娘の意識下に隠された「淫ら

さと邪悪さ」が目覚め出す瞬間を描いているものと述べている。⁴なお、岩佐の考えるような娘に秘められた「淫らさと邪悪さ」を具現化したものが「女郎蜘蛛」の形象であるとしたら、それは蜘蛛という生物自体に付加された言説にも呼応すると考えられる。雌蜘蛛との交尾に対し雄蜘蛛が全ての命を注ぎ込んで生殖の役目を果たす⁵、あるいは交尾の際に雌蜘蛛が雄蜘蛛を喰い殺す⁶といわれている生熊が自身の「生命のすべて」を彼女に注いだ清吉と、「ほんとうの美しい女」へ生まれ変わり男を「肥料」にして生きていく娘の構図ときれいに重なりを見せる。

このように短編小説「刺青」に登場する娘と「女郎蜘蛛」の生物性に示唆される通り、身体といえずみが連動している様子は『黒蜥蜴』の冒頭章〈暗黒街の女王〉においてもはつきりと映し出されている。G街の深夜会に君臨した女賊が「黒天使！いつもの宝石踊りを所望します！」という誰かの声のもと裸体を晒し、エキシビジョニズムを披露する場面において、露わになった左腕にクローズアップされ、「一匹の真黒に見える蜥蜴」の「入墨」がまるで「生きているかのように」躍動的に描かれる。

「オイ、見ろ、黒蜥蜴が這い始めたぞ。なんてすばらし

いんだろ」

「ウン、本当にあの小さな虫が、生きて動き出すんだからね」

意気なタキシードの青年が囁き交した。

美しい女の左の腕に、「一匹の真黒に見える蜥蜴が這っていた。それが彼女の腕の揺らぎにつれて、吸盤のある足をヨタヨタと動かして、這い出した様に見えるのだ。今にもそれが、肩から顎、顎から顎、そして彼女の真赤なヌメヌメとした唇までも、這い上がって行きそうに見えるながら、いつまでも同じ腕に蠢いている。真に迫った一匹の蜥蜴の入墨であった。

この場面は「黒蜥蜴」という言葉自体が本文中に初めて登場する瞬間でもあるが、その「入墨」の全貌が「真黒」と書かれていることから分かる通り、皮膚に色が入り込んで黒でも青味を帯びて見える通常のいれずみとは異なり、本物の黒色の墨を塗りつけたかの如く明確な輪郭が強調されている。「黒蜥蜴」という一匹の生物として実体を持った「入墨」は「エジプト宮廷」の「艶めかしき舞踊」を踊る女賊の腕の動きと共に「吸盤のある足をヨタヨタと動かし」て、「肩から顎、顎から顎」へと這い上がっていく

ように錯覚させる。更には、左腕から這い上がった先にある「真赤なヌメヌメとした唇」という爬虫類の身体を彷彿させる場所での到達しようとしていく。ここで指摘したいのは、女賊黒蜥蜴とは一人の人間ではなく「入墨」の形象を基にして作られた一つの意識の表れであるということである。このエキシビジョニズムの場面において、女賊の身体は「桃色の肉塊」と表現されている。Kホテルで雨宮潤一の前で裸身になる場面でも同じ表現が使用され、更に自ら身体を丸めてトランクの中に入る姿は「腰部の皮膚が張り切り」、「お尻が異様に飛び出して見え」るなど通常の人間の形態とは異なりゆがんでおり、「何かしら畸形な」印象を抱かせるものとして描かれている。高原英理が「語りの事故現場」(『群青』五一巻・平成八年六月)の中でこのようなエキシビジョニズムの場面における「肉塊」という表現が「人格を持たない」ものと捉えている点においても、女賊の肉体が物質的なものとして変容していると読み取ることができよう。すなわち、器である女の身体に「一匹の真黒に見える蜥蜴」の「入墨」が刻印されることで、「刺青」の娘の如く内側から「生き物」としての強い意識を呼び起こされている様子が浮かび上がってくるのである。黒ずくめの洋装と軽やかな身のこなしで「綽名の黒蜥蜴

そつくりの素早さ」で名探偵明智小五郎の捕縛の手から逃れ、「地底美術館」が包围され最大の窮地に立った時に蜥蜴が尻尾を切って危機から逃れるように、黒衣の袖を切り破いて刑事を振り切る姿においても女の身体から「黒蜥蜴」という一匹の生物を想起させるものとして描かれている。「美しい女の左の腕」に「入墨」が蠢き出した時、「黒蜥蜴」の魂がその肉体に宿り女賊黒蜥蜴として内側から形成されていくのである。

では、雄蜘蛛を「肥料」にして生きる雌蜘蛛の性質を備えた「女郎蜘蛛」のように、蜥蜴という生物が示唆するものの、更にその全貌が「真黒」である所以は如何なるものなのか。次章以降、作中に見られる色彩と性の表象から「黒蜥蜴」の意識がどのように反映されているのかを論じていく。

3 変色―「五色」の世界を吸収する「黒蜥蜴」

『黒蜥蜴』の作中の表現を辿ると、「五色」という言葉が多用されていることが分かる。殊に冒頭章の〈暗黒街の女王〉に繰り返し登場し、G街の「ネオン・ライトの闇夜の虹」が「幾万の通行者を五色に染め」上げており、暗黒街の大夜会の内部では、「五色の粉紙」に「五色のテープ」、

「五色の風船玉」が霧散し多くの男女が騒ぎ続けている様子が描かれている。また、国内最高級のダイヤモンド「エジプトの星」を手にした女賊が「五色の焰、本当に五色の焰が燃えているのでございますわね」と眩き、地底の施設美術館に納められる際にも「シャンデリヤの光を受けて、五色の焰と燃え立つ大宝石」と記されている。これら五つの色彩が具体的に何色を指すのかは明記されていないが、江戸川乱歩の諸作品においても「五色の光」や「五色の虹」というように類似した表現が多数登場することから、「五色」は特徴づけるべき色彩形態だと考えられるだろう。

元々、「五色」という色の概念は古代中国で作られた五行思想から生じたものである。五行は「木、火、土、金、水」を地球上の基本的な構成の五大元素」として、「人間が自然界で生活していくうえで、つねにもっとも大切にしていかなければならないもの」と考えた自然哲学の一つとされており、この五大要素それぞれに様々な事象をあてはめることで自然現象や人間社会を体系化し、色彩も同様に順から青・赤・黄・白・黒と五つに定められている。このような古代中国の思想体系の中で編み出された「五色」において、木を司る青、火の赤、土の黄色は、今日の色彩学でも馴染み深い印刷機のインクや絵の具の混色の原理となる減

法混色を表しているといわれている。日本色彩学会編『色彩科学事典』（朝倉書店、平成三年）には、それぞれシアン（青緑）・マゼンダ（赤紫）・イエロー（黄）という「色料の三原色」に該当し「すべての色相をつくり出すことができる色」の集まりとして、この三色に加えて「すべての色光を包含する」白と「三原色の混色に生じる」黒が存在している」と記されている。このことから「五色」という言葉には色彩全てを内包した広義的な意味が込められていると考えられるだろう。なお、『黒蜥蜴』の冒頭に登場する暗黒街の大夜会と類似した場面として、長篇小説『影男』（『面白倶楽部』昭和三十年一月〜十二月）のキャバレーの様子が次のように描かれている¹⁰。

そのショウの舞台には、赤、青、黄色と、五色の照明が交錯し、客席からはテープ火花がポンポンと発射され、五彩のテープが三人の金色の踊子の頭上に雨と降り、無数の巨大なゴム風船が、五色のクラゲの群のように、空間を漂い、派手なバンドの気ちがいめいた奏樂が、ギラギラした色彩の混乱と相応じて、場内数百人の男女を、狂喜の陶酔に導いていた。

このキャバレーの描写を眺めると、女賊が初登場する暗黒街の大夜会を彷彿させるような「五色」または「五彩」の色をした「照明」、「テープ火花」、「ゴム風船」が飛び交い、狂気めいた男女が乱痴気騒ぎを起こしている様子が浮かんでくる。『影男』ではこの「五色」の中で「赤、青、黄色」というように具体的な色の説明がされており、それらが「ギラギラとした色彩の混乱」を起こしていることからキャバレーの中は色鮮やかな原色の世界となっていることが推測できる。同様に「五色」が多用される暗黒街の大夜会においても、このような彩りにあふれた風景が広がっていることは想像に難くないだろう。「五色」が入り乱れる暗黒街の大夜会の色鮮やかな世界とは対を為すように女賊黒蜥蜴は「真黒なイブニング・ドレスに、真黒な帽子、真黒な手袋、真黒な靴下、真黒な靴」という全身黒づくめの装いで姿を現す。作中で幾度と「黒衣婦人」という呼称が用いられていることから分かる通り、女賊にはほとんどの場面において絶え間なく「黒」一色の印象が備わっており、雨宮潤一とは「醜い赤ネクタイの若者と目醒めるばかり（原文ママ）美しい黒天女」と、岩瀬早苗とは「真黒な絹のドレスと、オレンジ色の羽織」というように身に纏った色彩の特徴によって女賊と他の人物が対照的に描き出され

ている場面も見られる。

このように一貫して「黒」という色彩イメージが付加された女賊は、「黒蜥蜴」という呼び名に則った形で名探偵明智小五郎と対決を行う。それは両者の間で幾度と繰り広げられる化かし合いであり、「黒」一色の女賊が変装によって様々な人物に「変色」するというものである。彼女の変装を辿ると、タクシードライバーの運転手姿になり変わり雨宮を驚かせ、Kホテルでは有閑マダム緑川夫人を装い明智や岩瀬庄兵衛達の輪の中に難なく溶け込むことに成功する。続けて早苗を部屋に連れ込み計画通りトランクの中に詰め込んだ後に声真似も用いながら早苗本人として振る舞い、明智や警察の目をかいくぐって逃走する際には気取った雰囲気青年紳士になる。再び早苗を誘拐し通天閣で岩瀬にダイヤモンド「エジプトの星」を要求した時には緑川夫人とはまた別の「まるで相好が変わ」った金縁眼鏡に丸鬚の和服の婦人の姿で現れ、最後は追手を攪乱するべく通天閣の売店の「お神さん」になりすまして逃走を図る。

従来、蜥蜴には色を変えするという生物学的特徴が備わっている¹¹と認識されており、特に古代中国では「体色を変え」、「変化しやすい動物」であることから蜥蜴の象形文字である「易」の字に変化の意味が加わったとも伝えられてい

る¹²。更に中国の明朝時代に記された本草学研究書『本草綱目』の鱗部の項目においてトカゲは「形小さくして五色があり、尾が青碧色で美しいものを蜥蜴といふ」と説明されており¹³、「すべての色相をつくり出すことができる色」である「五色」という言葉が登場する。このような「黒蜥蜴」の「変色」が最も明確化されているのがKホテルの一連の騒動の場面である。明智小五郎と対峙した女賊は緑川夫人として振る舞いながらも「名探偵に対する女賊の燃える様な闘志」に向け、互いに「持っている限りの宝石類」と「探偵という職業」を賭け合い内なる勝負を繰り広げていく。明智の前では始終正体を隠し通しながらも「女賊」と「緑川夫人」と幾度と表記が揺らぎ、味方内である緑川夫人の顔から徐々に「名探偵への敵意を露わ」にした女賊の顔が交互に見え隠れしていく様子が描写されている。とうとう明智が「その緑川夫人こそ恐ろしい女賊です」と二者の同一性を明らかにした瞬間、緑川夫人は完全に消えうせ、女賊黒蜥蜴の顔が表に現れ、そのまま部屋から逃走した後に「僅か三分間」の間にいとも容易く青年紳士に成り変わる。このように「黒蜥蜴」から「緑川夫人へ、そして全くの別人である青年紳士へと、全ての色彩を内包した「黒」から「緑」へ「変色」し、再びまた違う色へ移ろう過

程が見えてくる。さながら色のフィルターを重ねたり外したりすることによって様々な色彩を作り出す減法混色の原理のように、様々な人物へと変貌を遂げる姿が映し出されているといえよう。女賊黒蜥蜴は「五色」に輝く色鮮やかな世界を全て「黒」の中に吸収し、蜥蜴が体色を変ええるが如く自在に「変色」していくのである。

4 間性―「僕」か「あたし」か―

「黒蜥蜴」という生物を身に纏った女賊は「変色」に留まらず「間性」という性質も見せていく。「間性」の定義については巖佐庸編『岩波生物学辞典』（岩波書店、平成二十五年）において「雌雄異体の種のある個体において、性形質が完全な雌型または雄型ではなく、中間的な異常を示すこと」と定義されており、爬虫類生物の中にはこのように雌雄の染色体間に差異が全く無い「間性」の個体が存在し、卵が孵化する時の温度によって性が決定されるという現象が起こるとされている。一般的に生物学上では温度依存性決定（TSD）と呼ばれており、核型やゲノム情報といった遺伝的な特徴に性差が見られず、トカゲ亜目の多くが低温の場合は雄、高温の場合は雌になることが言われている¹³。このように「男」であるのか「女」であるのか、明

確化されずに二つの性の狭間に位置する「間性」の表象は、作中に見られる女賊黒蜥蜴の言動や振る舞いに幾度と散りばめられている。

女賊は作中で度々「あたし」や「うだわ」といった、一般的に女性が用いるとされる言葉遣いを基盤に、時折「僕（ボク）」という男性的な一人称などを交えて「何を云っているのよ。僕がそれに気がつかないでも思っているのかい」／「僕は宝石も御執心だけど、宝石よりもあんたの身体が欲しくなった。決して断念しないわ」など、まるで二つの人格が入れ替わり立ち替わり話しているかのように「僕」と「あたし」を会話の中で交錯させる。作中で「男と女とちゃんぽんの言葉遣い」と表現されるこのような口調は「僕」と「あたし」が混ざる時もあれば暫く「あたし」の状態が続く時もあり、非常に変則的な揺らぎを見せる。金水敏が提唱した「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）」によって「特定的人物像（年齢・性別・職業・階層・時代・容姿・風貌・性格等）を思い浮かべる」ことを可能とする「役割語」¹⁴という概念と併せて見た時、女賊を除いて作中に登場する主要人物達は皆一様に社会的立場から想定されるような「役割語」で会話をしており、その「役割」なるものから顕著に外れる

ような状態にはならないことが窺える。殊に性別的な側面においてその制約は固いものと見られ、男性人物達が「あたし」や「うだわ」という言葉を用いる場面は一切無く、女賊と同じく女性人物である岩瀬早苗と桜山葉子に至っては身分も性格も異なるものの、そのような要素は反映されずに両者とも「あたし」という一人称に「うですの」、「うだわ」などという均一的な女性の「役割語」を用いている。

また、女賊は周囲を欺くために変装によって別人物になりすまし、その中でもタクシードライバーや気取った青年紳士と男装を行うことで異性としても姿を変える。タクシードライバーとして現れた際に登場する「男装の麗人」という比喩は主に少女歌劇の男役スター、あるいは日中戦争下において女スパイとして暗躍したと伝えられている川島芳子という女性に対して使われていたものである。大正初期に宝塚少女歌劇（現宝塚歌劇団）の先駆となる宝塚唱歌隊の結成以降、昭和初期にかけて熱烈な少女歌劇ブームが巻き起こる中でも、宝塚少女歌劇と人気を二分しコケティッシュなダンスを特徴とした松竹歌劇団の第一期生・水の江瀧子が昭和五年の『松竹オンパレード』という舞台でシルクハットとタクシードを身にまとい、男役初の断髪姿で舞台に現れたことから「男装の麗人第一号」と謳われ、

スターとして不動の地位を確立した¹⁵。川島芳子は清朝最後の王女であり、幼少期に日本人の養父に引きとられて以降日本軍政界と関係を築き上げ、人前では断髪に男装姿で現れ男言葉を用いたことでも世間の注目を集めており、『黒蜥蜴』連載一年前の昭和八年には村松梢風が彼女をモデルにした「男装の麗人」という小説を発表している¹⁶。このように『黒蜥蜴』連載と同時代において、断髪に男装姿と「僕」や「君」などの男性的な言葉遣いが「ファッショナブルでスマートなイメージ」¹⁷として若い女性を中心に流行していた様子が窺える。ただしどれほど振る舞いを変えたとしても「男装の麗人」は完全に性そのものを「男」に変えたことにはならない。男役スターの舞台上におけるジェンダー（性的役割）が「男」であったとしてもセックス（生物学的性別）自体は「女」であるように、女賊黒蜥蜴も作中で「女魔術師」、「黒衣婦人」、「黒天女」などの繰り返される呼称や「好ましい曲線に縁どられ」て「熟し切つた「美しい女体」という身体描写からセックス（生物学的性別）は「女」であるという事実は揺らがないのである。

しかし登場人物達の「役割語」の規範からも推察される通り、作品内では「男」であるのか「女」であるのか、性

がそれぞれ分岐されるべきものとして見なしている社会の様相が映し出される。上流階級の人々が集まる「帝都第二」のKホテルでは、女賊扮する「緑川夫人」と岩瀬早苗、明智小五郎と岩瀬庄兵衛とが「自然の勢い」として「男は男、女は女と、会話が二つに分れて」いくように、社会的立場の中でも身分や経歴よりも最優先でジェンダーの明確な二分化が示唆されていると考えられる。また、〈令嬢変身〉という章で早苗が長椅子の中にいた男と入れ替わり誘拐されたトリックの説明に対して、岩瀬が「すると、早苗がその酔っぱらいに化けたのだとおっしゃるのですかね。冗談じゃない、わしの娘は二形^{ふたなり}ではありませんぜ」と返答している。「二形」とは男女両性具有を意味するものであり、正確には半陰陽——すなわち男性と女性の生殖器などの身体的特徴が混合した身体的特徴を指すが、岩瀬の発言からは身体的特徴と限定されないにしても女性である早苗が男性である酔っ払いに姿を変えてしまったとして、セックスが「女」から「男」へと転じたことに対する否定的な態度が窺えよう。〈令嬢変身〉という章題が指し示す通り早苗が酔っ払いに「変身」するという事態は、言い換えれば女賊が変装や男言葉で以て男性として振る舞うことと同等の状況でもある。岩瀬は「二形」を認可しないことによって間

接的に女賊黒蜥蜴の「間性」としての存在性を拒んでいるのである。このような点においても性決定の枠内に縛られた者達とその外側で自由に往来を果たす女賊黒蜥蜴の存在が対比される様子が見えて来るのではないだろうか。

周知のとおり、女賊黒蜥蜴は豊富な肉体を持ち、社交術にも犯罪経験にも長けた成人女性として描かれている。しかし、作中で唯一の年齢描写において「三十を越した」女賊に「少女の様にあどけなく、若々しく見える」という情報が付加されていることは見逃してはならないだろう。身体面では女性としての成熟ぶりが見られる一方で身に纏った雰囲気や挙動によって暦年齢よりも遥かに幼く見えているという点に、孵化する前の蜥蜴にもたらされた「間性」が反映されていると考えられるのである。彼女は明智との対決を目前にして興奮気味に「ね、潤ちゃん、すばらしいと思わない？」と雨宮の手を取り「感情のまにまに」握りしめたり振り回したりするなど、その仕草にも子供らしさを見せている。明智を船上で長椅子ごと沈めた時にも悲しみにうちひしがれて、「五つ六つの子供のようにワアワアと声を上げて」泣き出し、早苗と一緒に手を取り合い泣き叫び続ける様子は「いたたいけな幼女」と比喩されるほどであり、感情の喜怒哀楽を素直に表に出しそれを直接的な行

動に移す様子が幾度と見られる。犯罪手法を辿ってみても「魔法のトランク」と「子供だましの人形の首」を駆使し、岩瀬家邸宅では「昔々の西洋のお伽噺」と「小説家の荒唐無稽な空想」を再現した「人間椅子」の手品で欺くという、「思い切った魔法」を使いながら早苗の誘拐を成功させるという点において、姑息というよりも無邪気という形容詞が似合うような子供が仕掛ける悪戯のような色を帯びている。更には作品の後半で秘密基地さながらに誰にも知られないようなところに建設された「地底美術館」に向かい、その中で残酷ながらも根本的には子供じみた遊戯が行われていることが明かされ、人間の身体を剥製にして「永遠に年をとらないお人形さん」に変えたり、大水槽の中に「人間を入れて遊ぶ」ことを楽しんだり、女賊にとつての巨大な遊び場としての空間が映し出されているのである。

以上の通り、「少女の様にあどけな」いと表現される女賊黒蜥蜴の行動や思考の端々には精神年齢の幼さを感じ取れる。妖艶な女賊という大人の女性としての振る舞いを表に出しながらも、その裏側にある無邪気でありのままの感情をさらけ出す幼子の顔が見え隠れしているのである。このような女賊の稚気は高原英理が述べている文学における「少女型意識」に通ずるものがある。高原は「セックス（肉

体上の性）」において「女性」という「分類をひきうけたもの」が、「ジェンダー（性的役割）」において「女性」を「ひきうけようとしないうる状態」が「少女」の「意識を作る構造」となると捉えられている¹⁸。女賊黒蜥蜴は「女」という生物学上においてのセックスを所持しながらも、言葉遣いや服装などの副次的な性的特徴に「男」と「女」を混合させることによってジェンダーを未決定にしている。それによって「少女型意識」として蜥蜴の「間性」を形成し、「男」であるのか「女」であるのかという二分化を迫る世界から身をかわしていく。雌雄の中間地点に位置し、生まれる前の未分化な状態の中で二つの性を往来し続け、ほんのわずかに変容させれば「あたし」にも「僕」にもなれる、無限の意識変革の領域を持つ存在として描かれていくのである。

しかし、このような「間性」の意識はやがて女賊の性決定が行われることによって瓦解していく。その決定打は名探偵明智小五郎に対する恋情である。両者の対決は智慧を使って互いに相手の目を眩ますものであり、肉弾戦のように直接的に互いの身体が近づく戦い方は行われない。ただし、女賊が船の中で長椅子越しに明智と会話を行う場面において、「お互に（原文ママ）体温を感じ合わねばかり」の

状態が描かれる。女賊はそれまで船内に潜む明智の影に怯えているが、長椅子から明智の身体を認識し、尻の下にいる明智を「敵ではなく恋人でもある」かの如くに感じ始め、本来敵同士である筈の二人の言葉の掛け合いが「夫と妻の寝物語」のように変容していく。この場面を経て、性が未分化な状態であった女賊が明智の死を悲しみ大声で泣き出し明智に想いを募らせる素振りを見せ始める。また、檻の中で早苗と香川青年の仲睦まじい様子に嫉妬して癪癪を起す点においても徐々に「女」としての意識が芽生え始めていることが窺えよう。結局のところ、長椅子を隔てて触れ合っていたのは本物の明智ではなく女賊の部下松公であったが、最終章の〈蠢く黒蜥蜴〉において実体のある明智小五郎と再会し、女賊の遊び場であった「地底美術館」を陥落されたところで今度こそ本物の明智と女賊は身体を触れ合わせる。刑事の手から逃れた女賊は毒を仰ぎ、明智一人を部屋に誘導する。息も絶え絶えな彼女の口調にはもう「男と女とちゃんぽんの言葉遣い」は見られず、「貴婦人のようにおとなしやか」なものと変わっており、「あたし、あなたの腕に抱かれていますのね。……嬉しいわ。……あたし、こんな仕合せな死に方が出来ようとは、想像もしていませんでしたわ」と明智との身体的な接触を実感し、

最期は「たった一つのお願い」として明智に口づけを求め、微笑を湛えたまま息を引き取る。女賊は最期を迎えるその時に自ら「間性」の意識を手放し、明智小五郎を「男」として愛することで二分化の世界へと、「女」としての性を決定づける。生身の明智を求めることで「男」であるのか「女」であるのか区別化する社会の規範に留まり、それに伴い「黒蜥蜴」の意識が女の身体から乖離していく様子が示唆されるのである。

5 おわりに ― 蠢く「黒蜥蜴」の魂 ―

これまで一つの魂として女賊の身体に憑依した「黒蜥蜴」がどのように表象されているのか、「変色」と「間性」という点に着目して具体的に見てきた。「五色」の世界を吸収し全ての色彩を網羅した「黒」から色を選び取っては自在に姿を変えていき、性の枠を超えて子供のように軽やかに二間を往来していた彼女であったが、そのような蜥蜴としての生き方は明智に対する想いが膨らんだことによつて終焉を迎える。

そして「黒蜥蜴」の魂が象られ再び女の身体として初期化した後に残るのは、情報を意図的に操作していく語り手である。それは開示する情報と隠蔽する情報とを選び取

り、「洗練されない口調」で「少しずつ手探りに前進してゆくような感触を」与えるもの¹⁹として、読み手の視点を操作させていく。「読者諸君」いう直接的な語りかけは江戸川乱歩の諸作品の中でも多用されているが、殊に『黒蜥蜴』では場面が一気に別のものへと切り替わるタイミングや、トリックの伏線を仄めかす部分において語りかけが頻出する。

このようにして作中の随所に介入してくる語り手には、活動写真といった無声映画の上映中にスクリーンの横に座り映像の説明を行う活動弁士の姿が投影されていると考えられよう²⁰。時に声色を用いながら映画の様相を実況し、観客の映像に対する視点を操作する活動弁士の如く、語り手は目に見える形で浮き彫りにされた物語を辿り読み手を引き連れようとしていく。言い換えれば、『黒蜥蜴』は活動弁士のような語り手の解説を行うことによって映像的な作品として作られているのである。一面だけで繰り広げられる奥行きが無い世界を避けて、映画の如く様々な角度で場面を映し、可視化できる情景を常に意識されたものとなっているのである。解説者である活動弁士とセットで映画が鑑賞されていたように、語り手の介入を前提とした描写として見なす必要があるといえるのではないだろうか。最終

章の〈蠢く黒蜥蜴〉において女賊黒蜥蜴が息絶えるその瞬間、語り手はある可能性を示唆するかの如く次のような語りを見せる。

一世を震撼せしめた稀代の女賊黒蜥蜴は、かくして息絶えたのであった。名探偵明智小五郎の膝を枕に、さも嬉しげな微笑を浮かべながら、この世を去ったのであった。

ふと見ると、さい前刑事の手を振り払って逃げた時、黒衣の袖が破れたのであろう。美しい二の腕があらわになって、そこに、彼女のあだ名の由来を為した、あの黒蜥蜴の入墨が、これのみは今もなお生あるものの如く、主人との別離を悲しむがように、幽に幽かに蠢いているかに感じられたのである。

安らかに眠る女賊の死に顔から腕へと、切れた蜥蜴の尻尾を彷彿させる破けた黒衣の袖から覗く「黒蜥蜴」の「入墨」にクローズアップさせていくこのような視点の移行は、冒頭章の〈暗黒街の女王〉において女賊の左腕から「入墨」が這い上がっていく様子に着眼する場面と呼応している。しかし、冒頭章では踊る女賊の腕の揺らぎと連動して

年)を使用した。

【注】

1 三月号は休載。

2 新保博久「解説 魅惑する『黒蜥蜴』、二十面相の原型『人間豹』」(江戸川乱歩全集第9巻 黒蜥蜴) 光文社文庫、平成二十七年

3 山本芳美『イレズミと日本人』(平凡社新書、平成二十八年)

4 岩佐壮四郎『世紀末の自然主義―明治四重年代文学考』(有精堂出版、昭和六十一年)

5 小野展嗣「クモ学 摩訶不思議な八本足の世界」(東海出版、平成十四年)

6 今日生物研究において、雌グモが雄グモを食べる事例はあまり見られないとされているが、乱歩の長篇小説『蜘蛛男』(『講談倶楽部』昭和四年八月〜六年五月)の冒頭部においても、「蜘蛛という虫は、(中略)実に残忍酷薄なやつで、同類相食む為に二匹同居することが出来ない。(中略)猛悪無残な雌蜘蛛は、その大切な御亭主をさえ、油断を見すまし、ムシヤムシヤと食い殺してしまう。身の毛もよだつ怪物である」というように綴られていることからそのようなイメージが定着していたことが推測される。

※本文の引用は江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第5巻 押絵と旅する男』(光文社文庫、平成二十五年)による。

7 小野友道『いれずみの文化誌』(河出書房新社、平成二十二年)
8 初期短編小説である「人間椅子」(『苦楽』大正十四年十一月)で

「黒蜥蜴」が蠢いて見えるものとされているが、この最終章では絶命し動かなくなった女賊の身体とは対照的になお「生きているかのように」蠢いて見える「入墨」が映し出される。「主人との別離」と明記されている通り、宿主であった女の身体と乖離しながら「黒蜥蜴」の「入墨」自体に生命が宿っていることを想起させるものとなっていることが窺えよう。更に、冒頭章で「入墨」に眼差しを向けるのは大夜会の参加者である「意気なタキシード姿の青年」だが、最後に「蠢く黒蜥蜴」を直接見ている人物が誰かは特筆されていない。「黒蜥蜴」の姿を見届けるのは名探偵明智小五郎でもなく刑事達でもなく、全てを操作する語り手と、その視線が注がれた先に必然的に目を向ける読み手である。女の肉体は滅んでしまったが、「黒蜥蜴」の魂はそのまま残り、またどこか別の肉体へと移行していく。その可能性を読み手に感じ取らせるべく語り手が視点を同一化させ、「幽に幽かに蠢いているかに感じられた」と述べることで、読み手の意識下に「黒蜥蜴」の魂が蠢く姿を刻み付けようと試みているのではないだろうか。

※本文の引用は『江戸川乱歩全集第9巻 黒蜥蜴』(光文社文庫、平成二十七年)、『刺青・秘密』(新潮文庫、平成九

「五色の虹」、「パノラマ島綺譚」では「五色の光」など様々な作品に「五色」という表現が用いられている。谷崎潤一郎の諸作品にも「異端者の悲しみ」（中央公論 大正六年七月）「五彩の虹」といったように同様の表現が見られることから、谷崎の作品から想起される色彩の世界を踏襲しようと試みたとも考えられる。

9 吉岡幸雄『日本の色辞典』（紫紅社、平成十二年）

10 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第18巻 月と手袋』（光文社文庫、平成十六年）

11 荒俣宏『世界大博物図鑑第3巻 両性・爬虫類』（平凡社、平成二年）

12 李時珍著、鈴木真海訳『国訳本草綱目』（春陽堂書店、昭和五十四年）なお、『国訳本草綱目』ではトカゲを表す「蜥蜴」とヤモリを表す「守宮」を同一視しており「守宮」の種類のの中に十二時に色が変わる「十二時虫」で別名「五色の守宮」という名称が記されている。

13 伊藤道彦「両生類・爬虫類・鳥類の性決定システムおよびその分子機構」（『細胞工学』三二巻二月号、平成二十五年）

14 金水敏「ヴァーチャル日本語 役割語の謎」（岩波書店、平成十五年）

15 鷹橋信夫『昭和世相流行語辞典——ことば昭和史 WORD & WORDS』（旺文社、昭和六十一年）

16 上坂冬子『女たちが経験したこと 昭和女性史三部作』（中央公論新社、平成十二年）

17 堀江珠喜「文学とファッション 2. 黒蜥蜴」『繊維製品消費科学』第四十一巻五月号、平成十二年 (<https://doi.org/10.11419/senshoshi1960.41.457>)

「黒蜥蜴は変装の名人であり、男性にも化ける／「男装の麗人」こそ、大正から昭和初期の華やかな舞台のスターであった／もちろん今でも宝塚などのトップスターは男役であるが、『黒蜥蜴』が発表される少し前、清朝ラストエンペラーの従妹・川島芳子が男装で上海のダンスホールに現れ、ワルツ競技で優勝したり、（中略）「時の人」となっていた。／乱歩がこの男装のファッションナブルでスマートなイメージを取り入れることは、十分に可能であった」

18 高原英理『少女領域』（国書刊行会、平成十一年）高原は「少女型意識」に関して、「世上に「少女」として分類されることで認められる以上の男性的・大人の権利を要求し、またその意識や存在様式において、性的な境界を越えようとするものたちばかり」であり、「少女として意識しつつ世界を眺めたとき、その人は必ず分類不可能な存在となる」ものと述べている。

19 高原英理「語りの事故現場」（『群青』五一巻六月号、平成八年）
20 江戸川乱歩「活弁志願記」（『江戸川乱歩全集第30巻 わが夢と真実』（光文社文庫、平成二十七年）

（立教大学文学部文学科日本文学専修四年）